

# 国内看護系学会における会誌の発行提供体制について

大前富美<sup>1)</sup>、松本玲子<sup>2)</sup>、成田俊行<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup>大阪府立大学、<sup>2)</sup>大阪医科大学附属看護専門学校、<sup>3)</sup>埼玉県立がんセンター

## 1. 背景

日本の看護教育は、この10年間に於いて飛躍的に高度化し発展した。端的にあらわれているのが四年制看護大学および大学院数の増加であり、それは研究者数の増加をも意味している。その結果、看護系学会や研究会（以後「学会」という。）が多く生まれ、比例して、刊行される看護系学会誌（以後「学会誌」という。）のタイトル数も増加した。1990年代以降、設立された学会の多く（9割弱）が学会誌を発行しているが、そのうちNACSIS-Webcatで所蔵館を確認できたものは約90%あった。しかし、その所蔵館数については、約40%の学会誌が所蔵館数20館未満であり、そのうち10館未満のものが29%であった。（2006年3月現在）

一方、主なデータベース（医中誌Web・JDream・CiNii）では、いずれも約7割の学会誌が収録対象とされている。その結果、ある特定の看護文献が“存在する”ということとはつかめても、“どこにあるのかわからない”という状況が生まれている。また、所蔵館がわかっている場合は、ILLで文献を入手するのが一般的であり、その結果、看護和雑誌文献のILL件数増加<sup>1)</sup>、またNACSIS-ILL全体にしめる割合の増加も指摘されている<sup>2)</sup>。

このように所蔵館が少ない要因については、経験則ではあるが、発行部数が少ない、購入（販売）ルートが確立していない、（図書館側が）寄贈に依存する傾向がある、ということが考えられる。

## 2. 目的

上記のように、所蔵館が少ない（結果として文献入手を困難にしている）要因として3点あげたが、そのうちおよびに關係する学会側の要因として考えられる、学会誌の発行・提供体制について、学会会則および投稿規程、HP等をもとに調査し現状について明らかにしたい。対象は、日本看護系学会協議会のメンバーである28学会（2006年3月現在）とし、学会事務局に關すること 編集に關すること 発行体制に關すること HPに關すること（有無およびコンテンツ等）を主な内容として調査する。

## 参考文献

1)米田菜穂[ほか]. ビッグディール後のILL - 千葉大学附属図書館亥鼻分館における調査, 大学図書館研究 76 巻 p74~81.(2006.3)

2)佐藤義則[ほか]. ILL ログによる図書館關係構造の分析, 日本図書館情報学会, 三田図書館・情報学会合同研究大会要綱, (2005.10)